江戸の街道探訪　第８回　キャプションは赤字

東海道６　最後の難所、鈴鹿峠を越えて草津まで

■図1）東海道鈴鹿越え

* 四日市から鈴鹿峠を越え、草津宿までの東海道の西路は、街道の中でも昔から最重要視されている、言わば交通の要衝であった。家康はこのラインを第一に整備。四日市から草津の間（77.5キロ）に八つの宿場を設け、整備の充実化を促進した。とりわけ亀山宿、関宿、坂下宿などは、鈴鹿越えの助走路でもあり、繁栄。

四日市宿

* 桑名から約13キロ西にある四日市は、広い平野部に醸成された商業地。お伊勢参りの伊勢街道への出発点でもあり、交通量は盛ん。四日市は、毎月4日、14日、２４日と四のつく日にが立っていたためついた名である。幕府は、この発展する商業地を重視し、この地を幕府直轄の天領地に指定した。東西の鈴鹿ルートと縦の伊勢街道の交通量は大きい。宿場は発展し、本陣２，脇本陣１，旅籠屋９８を数える。宿場を出て南に下るとすぐに有名な追分に出る。この追分こそが東海道と伊勢街道の分岐点である。伊勢街道は、ここより伊勢湾に沿って伊勢神宮まで南に下る。追分には伊勢神宮、二の鳥居が立つ（桑名に次ぐ）。お伊勢参り参詣者と別れ東海道の旅人は右に転じる。東海道は鈴鹿山脈から伊勢湾に流れている鈴鹿川に沿って敷設されている。石薬師宿、庄野宿という比較的小さな宿場を経由し、やがて亀山宿へ着く。四日市から亀山宿まで２４㎞、６里。

亀山宿

* 東海道は亀山城を取り巻く形で通過する。亀山城に近づくと江戸口門があり、潜って右に曲がる。城郭に近づくと左手に亀山宿脇本陣椿屋、その先に亀山宿樋口本陣がある。立派な本陣。宿場は亀山城に沿って存在。本陣１，脇本陣１，旅籠屋２１と比較的小規模である。国貞の絵は亀山城郭の崖下を通る東海道大名行列の姿を捉えている。
* ■図2）東海道名所風景：国貞：東海道亀山：城下を通る大名行列

関宿

* 亀山宿を抜けると西へ５㎞も行けば関宿に着く。此処まで来ると鈴鹿山脈の臭いがしてくる。関宿は山裾前の平地にあるが、此処は古代からの軍事要衝の地であった。関宿の関は、６７０年頃、軍事上の目的で設置された「鈴鹿の関」を意味する。当時、日本三関のひとつであった。この地に家康は東海道４７番目の宿駅を整備する。大和街道、伊勢別街道とも繋がるため、宿場は重要な拠点となる。本陣２，脇本陣２，旅籠屋４２（関宿は、江戸当時の宿場の賑わいを彷彿とさせる町並みが東海道で唯一残されている）。宿場の東端にある追分からは伊勢別街道が繋がっている。京都、大阪方面から東海道を歩いてきた伊勢参りの人達は、ここから右に曲がって伊勢へ向かった。そのため、この追分には、伊勢神宮の鳥居が立ち、常夜灯が設置されている。

鈴鹿峠

* 関宿の西門を出ると、すぐに追分がある。ここは、東海道と奈良方面に行く大和街道との分岐点である。奈良に行く旅人は左に曲がる。東海道を行く人は直進。東海道は関宿を過ぎると、鈴鹿山系の丘陵地帯に踏み込む。

鈴鹿山脈と鈴鹿峠

* 鈴鹿山脈は滋賀県琵琶湖東から三重県までの縦の山脈である。そして鈴鹿峠は山脈の南端の、山脈の中では最も低い位置で山脈を東西に横切る、言わば峠道。東海道は緩やかな山道に入る。しばらく行くと鈴鹿の切り立つ山々が眼前に現れる。絶景である。するとそこに一軒の茶屋が現れる。次の坂下宿までのほぼ中間にある、茶屋。旅人は一様に茶屋で休み、眼前の景色を楽しんでいる。豪快な景色である。旅人が見とれている、眼前の谷を隔てて在る奇岩の山は、岩根山。奇岩を縫って幾筋もの滝が流れ落ちている。深山幽谷。この山を通称、筆捨山という。室町時代の絵師、狩野元信はこの山の姿を描こうとした。しかし、すぐに雲や霞みが立ちこめ、山の姿が目まぐるしく変化。ついに絵が描けず筆を捨ててしまった。この故事から人々は岩根山を筆捨山、茶屋を筆捨茶屋と呼ぶようになった。広重は、この風景を見事に表現している。関宿から坂下宿まで５．３キロ。ここは坂下宿よりの処である。
* ■図3）国会図書館：広重：坂の下、筆捨嶺。茶屋で寛ぐ旅人。鈴鹿の風景を彷彿とさせる。

坂下宿

* 坂下宿は鈴鹿峠の登り口にある。距離は短いがこの峠越えが難事であったため、旅人の多くが坂下宿に宿泊。翌朝から峠越えとなる。ために宿場は、この地形からは想像できぬほど繁栄した。本陣３，脇本陣１，旅籠屋４８。街道に沿って坂下宿松屋本陣、大竹屋本陣、小竹屋脇本陣などを中心に旅籠屋がひしめく。本陣３，脇本陣１，旅籠屋４８。
* 坂下宿を出ると、しばらく山肌を縫う、平らな道が続くが、右手に岩屋観音が見える、あたりから右上に登る山道に入る。するとすぐに片山神社。豪壮な神社である。そしてここが鈴鹿峠の登り口となる。

鈴鹿峠

* 片山神社から鈴鹿峠に登る、僅かな道程が険しい山道で、箱根に次ぐ難所といわれた。この間、石畳にはなっているが、「鈴鹿の山は「八百八谷」。長く険しいジグザクの山道は８町（９００ｍ）、２７曲り」といわれていた。漆黒の森の中、くねくねし曲がる、坂道の連続。古代から開通された道で、盗賊が横行する峠として知られ、坂上田村麻呂の群盗退治の話など幾つかの伝説が残る。峠の頂上に達すると視界が開ける（標高３７８ｍ）。そこに巨大な万人講常夜灯が立っている。高さ５．４ｍ、重さ３８ｔに及ぶ石灯籠で、江戸中期に四国金比羅宮講中が建立したものである。急峻な峠を登り切った旅人はここで休息し、さぞかし、ほっとしたことだろう。

土山宿

* 鈴鹿峠を越えるとゆったりとした下りが続く。土山宿に到着。この宿の絵はどの絵も雨降りの図である。伊勢湾から吹き上げてくる風が鈴鹿峠を越えると雨になるため、とにかく雨が多い。「坂は照る照る鈴鹿は曇る、あいの土山雨が降る」という馬子唄があるくらい。広重は土山宿に到着寸前の大名行列の姿を描く。雨、雨。一行は菅笠を被り、茶色の合羽。雨は黒い線で画かれている。もうひとつの「土山：すずか山中の図」では、雨を白線で描く。難しい画法を駆使。この絵では、土山宿から逆に鈴鹿峠に登る旅人の姿が描かれ、彼らのくるぶしは泥中に埋まっているのである。そのくらい、雨で土がぬかるんでいた。難行の場面である。
* ■図4）広重：東海道五十三次土山鈴鹿山：雨で泥濘の道を鈴鹿峠に登る旅人。土山宿から江戸に向かって雨中、鈴鹿峠へ登る。険しい景色がよく分かる。
* 土山宿の規模は、本陣２，旅籠屋４４。宿場に入る手前に一里塚があり、右手を見ると田村神社。これは千手観音の加護により、鈴鹿山に巣くう群盗を討ち果たした坂上田村麻呂を祀った古社である。

宿

* 東海道は、野州川に沿って西へと進む。甲賀の里を抜ける。この間、１２キロ。水口宿に到着。家康が伝馬制度を定めてから宿場町として発展。本陣１，脇本陣１，旅籠屋４１。江戸期、小堀遠州によって水口城が完成し、城下町の中に宿場が存在する。

石部宿

* ここから西へ約１１キロ行くと石部宿に着く。幕末には商家２１６軒、旅籠屋６２軒までに発展した宿である。

草津宿

* さらに西へ１０．５キロ。ついに草津宿に到達する。琵琶湖の東側にある、草津は、室町時代足利将軍が草津御所を設置した頃から東海道、中山道の交通量が増加。そして戦国時代には、軍馬の往来が最も激しい処として知られた。ために家康は東海道宿駅制度で草津を重要な拠点として整備する。なにしろ、草津は、東海道、中仙道、琵琶湖廻りの街道の分岐点でもあり、江戸時代の交通量は郡を抜いていた。そのことを象徴するかのように広重は大きな茶屋の前を通る、４人掛かりの早籠と大きな荷物籠（年貢米）を４人で担ぐ人足の姿で表現。大きな茶屋と各種籠の交通で草津宿の物流繁栄の様を著している。草津宿の規模は大きく、本陣２，脇本陣２，旅籠屋７２軒。
* ■図5）広重：国会図書館：草津：繁盛する大型立場茶屋と往来を行き交う、早籠、大きな荷物籠
* 草津宿から大津宿までは１４キロ。草津宿の西端京都出口から右を見ると、琵琶湖のの渡し場が見える。歩きを嫌う旅人は、ここから舟に乗り、大津宿松本石場まで、湖水の旅。琵琶湖の美しい景観を楽しみながらの船旅（8キロ）を洒落こむ。
* ■図6）広重：草津矢ばせの渡し口。琵琶湖を帆船が行き交う。